

相馬氏と妙見信仰

南相馬市 二本松文雄

はじめに

東北の代表的な夏祭りの一つである「相馬野馬追」（国指定重要無形民俗文化財）は、毎年七月最終土日月の三日間、福島県浜通り地方北部の旧中村藩領内から騎馬武者が集まる。南相馬市原町区の市街では約五〇〇騎騎馬行列、雲雀ヶ原祭場地では勇壮な甲冑競馬・神旗争奪戦、同市小高区の相馬小高神社境内で生馬を捕えて神前に奉納する野馬懸が行われる。日本最大規模の馬の祭典。特に野馬懸は生馬を奉納するという絵馬以前の信仰の携形態といわれる。

一、奥州相馬氏の妙見信仰

千葉氏が、妙見を弓箭神きゅうぜんしんとすると相馬氏の本拠地であつた相馬御厨みくりやにも多くの妙見社が勧請された。奥州中村藩相馬氏の祖は千葉常胤の次男師常で、源頼朝の奥州征伐に従い所領を賜つたが、元亨三年（一二三三）、六代相馬重胤の代に本拠地を下総国から奥州に移し、太田に館をかまえて下総国相馬郡から、星の宮（妙見宮）を奥州に勧請した。以来、相馬氏も千葉氏本宗家と同様、一族は、妙見信仰を精神的な支柱として強く結束し、新たに居館や城を太田・小高・中村へ移すに伴い、妙見祠も遷された。この結果、妙見信仰は相馬氏の領内に広く分布することとなった。

中世におけるこの地方の妙見の分布、特に相馬重胤の行方郡下向以前から在地の妙見があつたかどうかは不明な点が多い。宇多郡河北数村を領していた黒木氏は牛頭天王ござてんのうを鎮守としていたが、天文一二年（一五四三）に相馬氏に滅ぼされ、相馬三郎胤乗が黒木城主の時に本丸の乾いぬい（北西）隅に妙見を勧請している。標葉郡を領していた標葉氏の場合、行津なめづに鹿島館を築き鹿島の神を祀っていたが、今日ではこの地に天之御中主神あめのみなかぬしのかみを祀る星神社がある。標葉氏が滅ぼされて相馬の領地となった後、行津に妙見が勧請されたことが想定される。相馬氏がこの地方にもたらした妙見としては、最初に館を構えた地と伝えられる太田の別所の館跡とその周辺、相馬重胤の下向に伴って下総から来たと伝えられる一族が最初に祀った妙見の故地も含む。城を構え、実際に合戦の場となった小高城とその周辺、一時城を移した牛越城に妙見が分布する。領地の境界に関するものもある。二枚橋の妙見は天

正一七年（一五八九）の飯樋合戦の際、相馬義胤が伊達勢を追いやり、添箭（弓矢）てんせんを納めて神のしるしとしたとされるように、妙見は戦国時代には弓箭神・武神・境を守護する神としての性格が強かった。

二、野馬追

野馬追は、伝承では相馬氏の遠祖平将門以来の歴史を持つといわれる。

文献にあらわれる野馬追の記録は、慶長二年（一五九七）に相馬義胤が小高城から牛越城に移った時には、既に例年牛越城下（南相馬市原町区牛越）で野馬追をしていたという。また、慶長七年（一六〇二）に相馬義胤が牛越原で野馬追を、刈谷沢（南相馬市原町区西町三丁目）で野馬懸をした記録がある。

江戸時代の野馬追は藩主相馬氏と中村藩の行事として、五月中の申の日に野馬を追い、良馬を神馬として妙見に奉納して、一族の繁栄と領内の安寧を願って行われてきた。

江戸時代の野馬追は、奥州相馬氏の氏神である妙見の祭り、藩をあげての一大行事であった。野馬追は領民にとっても最大の祭り、近郷近在はもちろん他の地方からも多くの見物人が訪れて、露店も軒を並べる大変な賑わいであった。このため、野馬追は藩の文書・旅行者の紀行文・絵巻物・屏風絵などに記されている。

三、藩主相馬家と藩士の妙見参拝

『社寺万覚』（『熊川家文書』十二）

明和二年（一七六五）と翌三年の寺社に関わる記録。相馬愨胤の初入部（江戸から相馬への初入部）、元服などの記録。

初入部のために、妙見堂で「十五ヶ寺護摩」や「仁王会」を行うよう歓喜寺に命じ、八月三日に「仁王会」を執行。

入部後初めての氏神妙見社への参詣は明和二年七月九日。「御野馬被為献候」とあり、愨胤は相馬氏の氏神妙見社に贅として神馬を献上し、一家の繁栄と領民の安寧を祈念。

社参には歓喜寺が詰めて法楽を務めることが恒例となっており、また後日、領民を思つての国家安全の祈祷をも歓喜寺に命じている。愨胤初入部の大きな儀式は妙見社参拝と元服にあった。

『熊川兵庫日記』（『熊川家文書』五）

奥州中村藩家老の熊川家文書。筆者熊川兵庫の日記、藩の行事、藩主や相馬家に関わる記事多数。

安政三年（一八五六）

正月三が日には、藩主が七ツ半時・六ツ時に妙光院（妙見堂）参拝の記録。

『妙見社参服忌令』（江戸時代 個人蔵）

藩士が妙見をはじめ諸々の神仏を詣でる際の死忌みに服する期間について定めている。父母が亡くなった場合は服一年・忌二〇日など。

四、中村藩領内の妙見の分布 『奥相志』

江戸時代における中村藩領内の妙見社寺の分布は、江戸時代末の藩の地誌『奥相志』に詳しい。しかし、明治維新をむかえ、事業は途中で終了したため、南標葉郷と山中郷の記述が欠けている。『本邦小祠の研究』（岩崎敏夫 一九六三）では、南標葉郷と山中郷も含めた領内の妙見の分布は、計四四祠を数える。

明治維新前の藩士の総氏数は約三〇〇余、氏神の判明している一六一氏のうち妙見を氏神として祀っているのは三九箇所。特に元亨三年（一三二三）に相馬重胤とともに下総相馬から行方郡に下向してきたと伝えられる岡田氏・門馬氏・青田氏などでは複数の家で妙見を祀っていた。

これらの妙見祠は藩主相馬家が祀った中村城内の妙見曲郭に祀られていた妙見神祠、相馬昌胤が幾世橋（浪江町）に隠居し、中村城から妙見の神殿を遷した養真殿、相馬重胤の下向に伴って下総から遷されたと伝えられる相馬氏の家臣団が、氏神として祀った妙見がある。また、各郷の宿場に置かれた陣屋や藩境など藩政に伴って祀られた妙見もある。

明治時代以降は開拓地に分霊された妙見もあり、『奥相志』に記載された妙見は江戸時代末時点のものだが、現在確認される妙見所縁の社寺等は合せて六九箇所。

（一）藩主相馬家と中村藩ゆかりの妙見 妙光院（現、相馬中村神社）

相馬氏累世の鎮守。慶長一六年（一六一一）相馬利胤が小高から中村へ居城を移したのに伴い、小高から中村の城内の西二の丸（妙見曲輪^{みよげんくるわ}）に妙見宮を遷した。妙見の宮寺であった北斗山妙光院は、現在の社務所の位置にあった。妙見境内凶（江戸時代 相馬妙見歓喜寺蔵（非公開））には、左上に妙見宮本殿、その下に幣殿と拝殿、その下に石段と参道。石段の右下に妙光院がある。妙光院は妙見宮造営以来、建物の修理や什具に至るまで藩主から与えられ、藩主の手厚い保護のもとにあった。

相馬妙見歓喜寺（相馬市中村）

相馬昌胤の命で、鎮守妙見の別当となる。慶長一七年（一六一二）に小高郷大井村岩迫から相馬氏の祈願寺として宇多郷中野村熊野堂跡へ移り、明治三年（一八七〇）に現在地に移る。妙見に関する経典や絵画を多数有する。領内真言宗の檀林（学問所）であったため、妙見に関する経典を発行した。明治の神仏分離で、妙光院の妙見を祀る。

太田妙見（現、相馬太田神社）

相馬氏の奥州下向当初の本拠地が南相馬市中太田の別所の館にあったといわれるため、

「太田妙見」と称される。太田妙見を祀った星藏院の寺院建築は、現在も相馬太田神社の祈祷殿として残る。太田妙見菩薩画像（江戸時代 相馬妙見歓喜寺蔵（非公開））は千葉妙見の典型的な像容で、玄武を踏み着甲した童子形の妙見が両手で剣を右下に向けて持っている。頭光には日月星の三光がある。

医徳寺（南相馬市原町区）

明治時代以降、太田妙見を祀る医徳寺が発行した妙見掛軸（南相馬市博物館蔵）には、上部に星曼荼羅、下部に太田妙見像。妙見は玄武に乗り、剣を足元に下した姿。寛助様北斗曼荼羅で、三重の四角で区画。一番内側の区画には、中心に北極星を表す大日如来一字金輪（ボロン）、その下に北斗七星を表す貧（ベイ）・巨（タラ）・禄（キヤ）・丈（ハラ）・廉（トロ）・武（ナ）・破（バ）と九曜、その外側の区画には十二宮、一番外側の区画には二十八宿を配する。九曜・十二宮・二十八宿という星宿は、天体の運行が人間の運命を左右し、星の位置によって世界の動静を読み取ることができるとする思想を表す。

小高妙見（現、相馬小高神社）

相馬氏がほぼ中世を通して居城とした城で、南北朝時代には南朝方に攻め落とされたこともあった。慶長一六年（一六一二）に相馬利胤が城を中村に移すまで妙見を祀っていた。城を小高から中村に移したのに伴い神体も中村城に遷したといわれるが、引き続き小高妙見が祀られ、野馬懸には生き馬が神馬として奉納された。

金性寺（南相馬市小高区）

小高の妙見祠に祀られていた妙見菩薩立像が、明治の神仏分離令の関係で金性寺に遷された。

養真殿（現、浪江町北幾世橋の初発神社本殿（浪江町指定重要文化財））

相馬昌胤が中村城内に妙見を祀っていた養真殿という神殿を、元禄一四年（一七〇一）に隠居先の北幾世橋村に遷し、金子森（御浄所）に妙見、末社住吉、玉津島の神祠を建てて信敬した。宝暦一三年（一七六三）、野火を恐れて町後に遷座した。昌胤の死後、神符

は中村に還座し、勅額は高松神庫（相馬市の都玉神社）くにたまに納められた。

西原公館の妙見 松島稻荷神社（南相馬市原町区上町）

慶長一一年（一六〇六）相馬義胤が建立した。野馬追時の藩主の宿泊施設が、南新田村の西原公館であった。この妙見には特に野馬追の安全を祈願した。西原公館は現在の南相馬市役所の位置にあり、市役所庁舎が建つ以前は敷地の北西隅に初発神社があったが、市役所建設に伴い信者が松島稻荷神社に合祀した。

(二) 相馬氏一族諸氏と家臣団ゆかりの妙見

元亨三年（一二三三）相馬重胤の奥州下向は、千葉氏の一族岡田氏をはじめ、相馬四天王と称された文間（もんま）・木幡・須江・青田の各氏を引き連れ、妙見・日鷲・塩釜の神を

伴って下総相馬から下向。これら諸氏も館に妙見を祀った。

岡田氏

初発神社（南相馬市小高区岡田）

岡田氏は相馬胤村の次子相馬五郎胤頭を始祖とする、相馬一族の長。元亨三年（一三二二）三）、岡田胤盛・胤康父子が相馬重胤に従い、岡田をはじめ数村を領した。建武元年（一三三四）岡田の塁（館）を構えた。初発神社は岡田氏の鎮守で、妙見神祠があった。

岡田神社（相馬市中村）

慶長一六年（一六一一）、岡田八兵衛宣胤は相馬氏が居城を小高から中村に移したのに伴い、岡田氏の居館を中村城三の郭の内の長徳寺跡に構えた。妙見祠は岡田氏の鎮守で、岡田館跡の西側に位置する。館の西側の堀に橋を渡して妙見祠に参った。

江井氏

初発神社（南相馬市原町区江井）

相馬氏の傍統、江井氏の守護神。江井館跡の西にある。はじめ江井館内に鎮座したが、文禄年間（一五九二～一五九六）江井氏が他所へ移り里社となる。万治元年（一六五八）、相馬忠胤が現在地の西山に再建した時の棟札がある。明治三年（一八七〇）初発神社となった。江井館跡の一角、馬場にあった正寿寺は妙見祠などの諸堂社を別当として管轄していた。その関係で妙見尊の祈祷札を発行していたと考えられる。同寺は文政九年（一八二六）医徳寺に併合された。妙見尊版木（江戸時代個人蔵） 銘「梵字（ソ・弁財天）妙見尊星王供攘火安康祈攸」。鰯口（南相馬市指定文化財 元禄九年（一六九六） 個人蔵） 銘（抜粹）「奉納鰯口 妙見宮 于時元禄九丙子九月九日江井村志賀助五郎 敬白」「本重作」。

木幡氏

氏神妙見社

同家の氏神妙見社は、以前は金沢氏の鎮守であった。金沢氏は元亨年間（一二二一～一三二四）以来、相馬氏に属し、金沢村を領していた（標葉郡立野村に住んでいたともいわれる）。館跡には寛文年間（一六六一～一六七三）以来木幡氏が居住した。鰯口（元禄一五年（一七〇二） 個人蔵） 銘（表）「奉 城明見（ママ）大明神 高平村半谷次右衛門」。〔裏〕「元禄十五年壬午年（一七〇二）八月十五日 大工泉田志賀光重」

飯樋の妙見

「妙見尊」石塔（飯館村飯樋 善心寺）

飯樋には陣屋があった関係で、藩士が多く住んでいた。善心寺境内に建つ「妙見尊」銘の石塔は、大正三年（一九一四）に士族が建立したもので、建立者の名が列記されている。

（三）境の妙見

妙見は北方を鎮護する神と考えられ、相馬地方の妙見像の多くは北方を守護する玄武に

乗っている。このため、相馬氏は北方に限らず領地の境界を守護する神としても中世以来妙見を祀ってきた。

西境 飯館村二枚橋 初発神社

伊達政宗と相馬義胤（一六代）の合戦では、伊達の手勢河俣（川俣）城代桜田右兵衛が飯土井（飯樋）を攻めて草野まで落とそうとする時、草野城代岡田兵庫胤景が早馬で急を相馬氏に告げ、義胤自ら出陣し、天正一七年（一五八九）六月一八日に二枚橋まで追っている。二枚橋の妙見（現、飯館村二枚橋。分水嶺にあるため、水境妙見とも称される）はこの飯樋の合戦で、義胤が自ら添箭（矢籠・矢筒などに入れた数本の矢）を納めて神璽とし妙見を祀った地とされる（勸請、天正一七年（一五八九）六月二二日）。

同社の水境妙見尊像図は道教色を帯びた鎮宅靈符神の姿。道教や陰陽道では妙見と同じ能力を持つと考えられている。

南境 大熊町熊町の妙見

領地の南境は南標葉郷の熊町（大熊町熊野）に熊町の妙見が祀られていた。神社南を流れる境川が平藩との境。熊町には藩の南境の番所などがあり、藩の南境を守護する妙見であった。

南西境 浪江町羽附・浪江町上津島の妙見

南西境の羽附（浪江町羽附の分水嶺）や上津島（浪江町上津島水境の分水嶺）にも境界の守護神として妙見が祀られていた。

北境

天正年間（一五七三〜一五九二）頃は相馬義胤と伊達政宗の間で激しく境界争いをして、北方の鎮護は特に重視していたはずだが、現在のところ、宇多郷の北辺では境の妙見は確認できていない。

なお、江戸時代の仙台藩領坂本の妙見（現、坂本神社。宮城県亘理郡坂元町）・逢熊（宮城県亘理郡亘理町）には、天文年間（一五三二〜一五五五）に相馬義胤らが勸請したといわれる妙見社が九社あるが、義胤はまだ子供。相馬氏と逢熊地方の妙見勸請については不明な点が多い。亘理郡を領していた武石氏が桶谷に移転するまでに勸請した可能性もある。

（四）戦勝地ゆかりの妙見

初発神社（南相馬市鹿島区横手）

応永一三年（一四〇六）から正長元年（一四二八）まで、岩松氏が横手・千倉^{ちくら}を領した後、天文年間（一五三二〜一五五四）、田中城が黒木弾正らに攻められた時、領主の相馬讃岐守平頭胤が妙見に戦勝祈願すると、神徳により戦に勝ち、天文年間に鹿島上町に社を建てたといわれる。

寛文九年（一六六九）に相馬忠胤の命で再興。当時は鹿島の町にあったが、明治七年に鹿島の町から横手の現在地（古墳の上）に遷され、横手の鎮守となった。

（五）庶民の妙見

初発神社（相馬市中村上町）

城下中村では相馬氏の祀る妙光院とは別に、上町に庶民の祀る妙見が祀られていた。ここは城の東側にあたり、町人屋敷や商家が多い地域であった。中村の大火でも難を逃れたことから、庶民の間では火除け神として信仰されている。

初発神社（相馬市中野）

城下町と宇多川を挟んだ南側は職人町で、大工町の妙見とも呼ばれる。重胤の下向に従い、下総から妙見像を背負ってきたと伝えられる鍛冶の長、伏見氏の神として祀られていたが、後にこの地域に住む鍛冶や大工の信仰を集めるようになった。

（六）日蓮宗の妙見信仰

日蓮教団には当初妙見信仰はなく、日祐の時代に中山法華経寺が千葉胤貞家の氏寺となつた関係で、その信仰が取り込まれたと推定されている。日蓮宗では、妙見が日蓮の前に示現したという伝承があり、日蓮宗では妙見は法華経の行者を守護するとして信仰されて妙見菩薩を祀ることが多い。江戸でも能勢妙見の御開帳がたびたび行われて、大変にぎわつたという。

佛立寺（相馬市中村）

中村城下で日蓮宗の妙見信仰を伝える。

星降りの霊験図は日蓮の苦難に満ちた生涯を凶解した画集の一枚である。文永八年（一二七一）龍の口で月天子の守護（江ノ島の方から飛んできた月のような光物）により打ち首を免れ、翌日、相模の依智にある本間重連邸に滞在し、月に祈つた日蓮の前に天から明星のような大きな星が降り、庭の梅の木の枝にかかったという説話。これは明星天子が日蓮に見参してきた証とされた。日蓮は三光天子（日天子・月天子・明星天子）の守護を受けているという考えから、星の仏である妙見菩薩を信仰するようになった。日蓮宗の妙見菩薩像は二臂（肘（腕）が二本）で立像では岩上の青亀の上に立ち、白蛇が妙見を回り総髪、二手で剣を地に立て、円光に代わって七星を示したものが多く、坐像では剣を頭上に

掲げた形（能勢型）が多い。

五、妙見への弓の奉納

『奥相茶話記』には、妙見の祭礼に伴って行われた、幼童と弓足軽による弓の奉納の記述がある。弓箭神（弓の神・武神）としての妙見に対して、弓の奉納は特に重視されていた。

一 螺始あり。其年吉日良辰を撰び北に向て吹初る。此日御扶持賜はる城下住居の諸奉公人登城。吹畢て各酒を玉はる。是に不遇ものは凶事の様に存ずるなり。

一 三月廿二日妙見祭礼、廿三日は国王の御祭礼なり。妙見堂にて其歳御城の御年男勤仕の幼童（十二三歳以下）出て的を射始る。神的畢て二の丸に的場を構へ、弓足軽素襖直垂にて射る。

屋形を始め出て見物す。足軽立て三返射る。其後若侍の内へ御所望あれば射るなり。右廿三廿二日両朝惣士へ御城にて饗応あり精進料理なり。廿二目的場にて酒肴出て潔齋を破る是も将門よりの吉例なり。野馬追も将門、将士の武事を習練の為始めしと云

日置流印西派の弓礼射（南相馬市鹿島区 南相馬市指定無形民俗文化財）

妙見は弓箭神であるため、特に弓の奉納が重視された。

塩崎地区には中村藩の弓足軽が住んでいたため、地区の若宮八幡宮・弁財天・妙見の祭りには日置流印西派の弓が奉納される。

塩崎弓組お妙見様と称される妙見神社は、小高妙見を中村に遷す途中、塩崎の西ノ入の大木の下で休んだので、その時から妙見祠を建てて妙見を守り神として三軒の家で祀ってきたと伝えられる。妙見菩薩立像（寛延四年（一七五二） 塩崎地区蔵）は玄武に乗り、剣を足元に下した像で、台座裏面には「自傳院十世住 祐譽作之 寛延四辛未歳（一七五二）一〇月二七日、宝曆に改元」六月廿五日」、光背を支える軸には「現住祐譽作之」の銘。

六、明治以降の妙見信仰

明治の廃藩置県のため、野馬追は藩行事としての継続はできなくなった。さらに、神仏混淆の神として祀られていた妙見菩薩は神仏分離により明確に区分されて、神社で祀ることがかなわず、妙見像は寺院で祀られることとなった。このため、神社では御神体の妙見を『古事記』の冒頭部分に登場する天地初発の時、高天原に成りませる神の名は、御中主神とあって、造化三神の筆頭の神とされる。平田神道では天之御中主神（天之御中主命）は全知・全能の神、絶対神として崇敬され、さらに妙見信仰と結びついた。このため、相馬地方では妙見の社を存続させるため、妙見祠を初発神社として祀った。この神社は「しよはつじんじゃ」と読まれることが多いが、古事記に基づけば「はじめじんじゃ」。

明治以降の野馬追はそれまで城を守護する妙見として祀られてきた別所の館（太田に所在）の太田神社、小高城の小高神社、中村城の中村神社という三社の神事として現在も継続されている（この三社は、のちに相馬太田神社・相馬小高神社・相馬中村神社と改称された）。

おわりに

古代には、中国大陸から日本に伝わった妙見信仰は、人間の運命を司り、困難から救い、運気を上げてくれる星の神として信仰された。

中世の相馬地方では、中世武士団千葉一族の精神的拠り所であり一族結束の象徴としての妙見が氏神・弓箭神・軍神として城や戦勝地に祀られた。近世には、妙見は氏神・城や藩境の守護神として祀られ、家臣や庶民の間にも信仰が拡大した。その姿は玄武に乗った着甲、持剣、被髪の姿が多い。一方、星曼茶羅の星宿や、陰陽道・道教色を帯びた鎮宅靈符神の姿もある。これらの製作年代はあまり古いものとは思われないが、宿曜道・陰陽道の思想が表れている。このように、中世・近世の相馬地方の妙見信仰は千葉氏流の妙見信仰を主流としつつ、陰陽道や道教の影響も受け、さらに日蓮宗の妙見信仰も伝わっている。相馬地方では野馬追の神として信仰された妙見は、近代になると、天之御中主神として野馬追の神・馬の神として信仰され、農民や運送業者などに馬体安全の守護神として信仰されてきた。その信仰は相馬・双葉地方だけでなく、青森・秋田など東北各地から北海道にも教線を拡大し、各地に相馬地方ゆかりの神社や遥拝所が置かれるようになった。そして、妙見（天之御中主神）は現代でもさまざまな願いを聞いてくれる神仏として、多くの人々に祈りと祭りが受け継がれている。